

昭和三十四年七月二十三日第一種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第九十号）

慈

光

第八卷

第九號

目

沙弥隨蓮を憶ふ……………花田正夫…(1)

往生について……………福島政雄…(5)

亡き妻の七回忌に懐ふ……………三瓶徳英…(9)

次

「北米日記通信」抄……………田中文男…(12)

沙彌隨蓮を憶ふ

花田正夫

隨蓮は京落の四条万里小路に住んで居りましたが、法然聖人に深く帰依して出家し、妻子を具して念仏申して居りました。そして常に聖人の御房につかへて居り、念仏法難の時は、聖人の御伴を申して四国の配所へも渡り、御歸洛の後も常に聖人におつかへ申して居りました。

聖人はこの隨蓮を非常にいとほしんで居られ、御臨終の時は枕辺に呼ばれて、

『念仏はやうなきをやうとするなり。ただひらに称名の行をもつばらにすべし云々』
と仰せられました。

隨蓮はひとへに御言葉を信じて、ふたごころなく念仏申して居りました。ことに聖人御往生の後はいよ／＼念仏に余念なく、三年の月日を送り、建保二年の頃に
『いかに念仏を申してゐても、至誠心、深心、廻向發願心、の三心をさへ知らないものは往生は出来ない』
と、聖人の教をうけて念仏申してゐる人々の間で申してゐるのを聞いた隨蓮は

いといふ行き詰りの生活を続けて居りました。

其時であります。或夜隨蓮は夢を見ました。その夢は次の如くでありました。

洛北、鹿谷の法勝寺の西門から隨蓮が一人お参りして見ると、境内にある池の蓮花がいろ／＼にひらいて何ともいへず美しい景色でありました。そこで西の廊下の方へ歩みよつて見あげると、御堂の中で沢山の僧侶がならんで居て浄土の法文を談合してをられました。

そこで隨蓮が階段をのぼつてみると、法然聖人が北の座に就かれて南向きに座つて居られましたが眼ざとく隨蓮を御覧になり、間近くお召しになりましたので、おそれかしくんで、御傍に参りました。そして隨蓮の心の内をまだ申し上げないさきに聖人が

『汝はこのほど、心に欲き煩うてゐるやうであるが、決して／＼思ひ煩ふことはない、心配するな、気かけな』と申されたので、隨蓮はびつくりして、この心配事はまだ誰人にも話したこともないのに、聖人はどうして御存じなのであらうかと、不思議に思ひながらも、一部始終のこゝとをありのままにつつまず申し上げますと、聖人は

『たとへば、間違つたことをいふ者があつて、あの池の蓮花を、あれは蓮花にあらず、梅ぞ、桜ぞといはんには、汝はそれを信じて、蓮花にあらざりけり、まことに梅であ

『故聖人は、やうなきをやうとす、義なきを義とす。ただひらに仏語を信じて念仏すれば、必ず往生するなり、とばかり仰せられて、全く三心のごとはお聞きしたことがない云々』
と訴えると、その人達は

『それは、文字も読めず、何一つとして心得のない者のために、聖人が方便として三心などのことを抜いて申されたまである。その証拠には聖人の書かれた御釈文にこの様に述べられ、あのやうに説かれてゐる云々』
と、經文や釈文を引用していかめしく申し聞かせました。そこで隨蓮は

『自分はまことに愚鈍の身であるから、聖人が三心などといふむつかしいことは抜きにして、方便の教を仰せられたのであらう。いやさういふことももつとものこと』
といふ風に、大きな疑心がおこり、このことを誰人かにお聞きせねばならぬ、と思ひ／＼して一・二ヶ月間、このことばかりを思ひ煩うて、今まで申してゐたお念仏も出な

る、桜であると思ふであらうか』

とたづねられたので、隨蓮は

『事実、蓮花であります。それを誰が何と申しましたも、そんなことはどうしても信じられません』

とお答へすると、聖人は

『念仏の義、またこの通りである。源空が汝に、念仏して往生することはうたがひなし、と教へたことを信じたのは、蓮花を蓮花と云ふのと同様である。深く信じて、あれこれとはからふことなく念仏を申せよ、悪義、邪見の梅、桜を、決して／＼信じてはならない』

と仰せられたので、余りの有難さのあまり、そこで夢がさめたのであります。このことは隨蓮にとつては、何といつても不思議といふほかはないので、何度も／＼不思議なことでした、不思議な夢でしたと、あきれ、おどろいて居りました。そしてこの夢をかぎりとして今迄の不審がことごとく消え疑心がたちまちに晴れて、

『聖人の仰せは、微塵も間違ひのないことであつた』

と、聖人の仰せのままにふたごころなく念仏申し／＼して八十歳まで長寿を保つて、往生の素懷を遂げられたのであります。

義なきを義とす

この隨蓮の物語は、法然上人伝にも、覚如上人の拾遺古徳

伝にも掲げられてゐる有名な事柄であります。

『念仏には義なきを義とし、様なきを様とす』

といふ大師聖人の常の仰せをそのまま身にうけて、八十年の生涯を貫かれた沙弥随蓮こそ、祖意をそのまま身をもつて瀉瓶伝承して下さつた方でありませう。

すべて常の仰せといふものは、御自ら書きつけられることもなく、仰せられながら御本人はそれと気づかぬまでに、その人のものとなりきつてゐるのであります。それはただ、常隨される者の耳の底に留る言葉であります。

聖徳太子の御持言『世間虎飯、唯仏是真』の金句は御妃橘女王様の耳の底に残り、天寿国曼陀羅の裏に残されたのであり、親鸞聖人の常の仰せは、御晩年に親灸申した唯円大徳の心に刻まれた金言であります。

斯うして常随昵近して下さるよき人がなければ、常に仰せられる金言実語も我等の耳目にふれることなしに終ることでありませう、この意味において沙弥随蓮の存在は、かけがへのない尊くも有難いことでもあります。

ことに親鸞聖人の御晩年に「義なきを義とす」といふ金句を、末灯鈔に三度、其他に、銘文、往生文類、御消息、正像末和讃、自然法爾章、等々にくりかへして述べられ、法然聖人の仰せであると大切に伝承して居られます。

ひであります。

「無義」とは、如來の御はからひに信順して、わがはからひを離れることでもあります。某師がそのころを

はかりなき 仏の慈悲をはからひて

はからひつきて はからはれてゆく

と詠じて居られます。何時を始めと知るすべもない、自力我慢のはからひが、如來真実の智慧と慈悲に調伏せられて、ただ願力ひとつにはからはれ、満たされてゆく生活、それが他力にまかせ奉ることであり、真宗念仏者の真面目であります。

曇鸞大師の論註に

『菩薩の仏に帰する。……動静おのれにあらず、出沒かならず由あるが如し……』

とは、無義、無我に、仏願に信順する範を示された御釈であります。

歎異抄の有名な第二条に

『親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまらすべしと、よき人の仰せをかうむりて信ずるほかに別の子細なきなり。……たとひ法然聖人にすかされまらせず、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさぶらふ……』

と聖人御自ら、無義無我の心底をそのまま表白して居られ、これは即ち随蓮の生活とおのつと一致するところで

ところが、法然聖人の御書物の中にはこの句が見出されないのがありますが、唯一つ、真偽未詳の書ではあります。知恩院蔵の『護念経』の奥書に

浄土宗安心起行の事

義なきを義とし、様なきを様とす。浅きは深きなり。ただ南無阿彌陀仏と申せば、十悪も五逆も、三宝滅尽の時の衆生も、一期に一度の善心なきものも、決定往生とくるなり。釈迦、弥陀を証とす。

建曆二年正月二日、

源空

と、法然聖人全集にあります。聖人はその月の二十五日に念仏の息絶え終られたので、御臨末に隨蓮に仰せられたことと符合をあはすやうであります。

然しこれは真偽未詳の書であります。親鸞聖人が、大師聖人の仰せとして「様なきを様とす」といふことを、恐らくは御自らもお聞きとりになり、更に隨蓮に会はれていよくその金言を常の仰せとして聞きとられるに及び、八十を過ぎられた老聖人がまたこの金句を、隨所に書き残され、或は口伝せられたことでもあります。

「義」とは「はからひ」であります。

「異義」とは、如來の御はからひに異なるもの、従つて歎異抄で申せば「先師口伝の真信」に異なるものであり、「聖人の仰せにあらざる」もの、凡夫の我執、我見、わがはからひであります。

そこで、これはひそかに私が想像申すことではありますがさう間違つてゐるとは思ひませぬ。それは親鸞聖人が六十を過ぎられて、関東から京都に帰られ、大師聖人の御廟に参られ、京都でお別れ申して以来の老聖人の御消息を隨蓮から聞きとられたことと思はれるのであります。

もとより隨蓮は学者でもなく、侍者として配所にもお伴を申し、御臨末まで親しくお仕へ申した沙弥であります。然し法然聖人は「女沙汰して智者振る人よりも、物を覚えぬあさましき人々の念仏申す姿を御覧になつて打ち笑ませ」られる方でありました。そのことは親鸞聖人が確かに見聞されたことでもあります。かうした点からも、法然聖人の御消息を聞くには何よりの人として隨蓮を訪はれたことと思ふのであります。そして、はからずも誰人からも聞き取るこの出来なかつた、大師聖人の常の仰せ

「義なきを義とす。様なきを様とす」

を聞きとられたと想像せられるのであります。

そして、聖人の晩年に関東の念仏者の中に、種々な異議を伝聞せられるにつけて『念仏には義なきを義とす』と繰り返し／＼仰せられつつ、その異義の根本の迷妄を破られ、しかもそれも親鸞聖人の私見ではなく、大師聖人の仰せそのままであると、伝承せられたのでありませう。その根本に沙弥隨蓮の御恩が輝いて居ると感佩して居ります。

往生について (一)

福 島 政 雄

六ヶ月ばかりたちましたかと思ひますが、今晚はこの前の東方偈の続きになりますが、今花田さんがそこを読んで下さったやうであります。

さて往生、實際この衆生の往生の有様、そこを釈尊がお説きになつてゐる。そこに入りますので、かういふところは私自身がお話する資格がないといふのが本当でありますけれど、まあ釈尊のお言葉に接しまして、私自身がどこどころやつぱり感ずるところはあるのはありますのでありますから、そこを申し上げて見ようと思ふのであります。

実は今日は拘留所に参りまして死刑囚の方にお会ひしてまゐりましたのであります。まだ二十五か六の極く若い男子の青年といつていい人ですが、私自身といたしましては、死刑ときまつた方にそんなにしてお会ひするのは始めてでありまして、実は私自身お話することが無いだらうといふことをおそれながら行きましたのであります。

とを考へましても、自分がいよく死ぬるんだといふ感じが無いのであります。

けれども、死刑の宣告をうけたといふことになりまして、それがその、たつたひとつが問題になりますわけでありまして、もう死の問題をどうしても解決しなければならんと、かういふことに違ひないと云ふことをお察しは出来るのであります。

そこでこの人間の死ぬるといふ問題でありますが、私自身は、いや子供である、親である、兄弟である、大事な友達であるといふものの死に、ズーとかう会つて来ております。その死といふことについての感じは、そういふところからさうし持つて居ないぢやないといふことになりませんが、さてこの世を去つて死んで行く人々。この仏教の言葉、往生といふやうなことは、私自身の上に結局どういふことになるのか、往生浄土といふことは、私にどんなひびきを与へられるかといふ問題になりまして、さういふところからこのお経を味つて見ますのであります。そうすると今日のところの一番の始めに

『仏、阿難に告げたまはく。彼国の菩薩は、みなまさに一生補処を究竟すべし。その本願、衆生のためのゆゑに、弘誓の功徳を以て自ら莊嚴し、普く一切衆生を度脱せんと欲はんをば除く』

といふお言葉があります。そのお浄土の菩薩は、一生補

けれども、その人に会ひますと云ふと非常な、何とも云へない柔和な顔をしてをられますし、そして自然と何か訊ねられる、それで私も樂にお話が出来るやうな氣になりまして、すこしばかりお話をしましたのであります。

然し、問題の最後のギリ／＼のところといふのは、死、死ぬると云ふこの問題であります。これも私共自分に考へて見ましても、私自身なんかも、これは昔のギリシヤのプラトンなんかいふ哲人の言葉を借りてまゐりますと「肉体といふ牢獄の中に閉ぢこめられた死刑囚のやうなものだ」といふことを前から聞いて居ります。成程、さう云はれて見るときうかと、私自身もいづれはどんなに長く見ても今から十年と寿命はありますまいと思ひますし、死ぬるといふ問題は迫つてゐるのに、死ぬるといふことを存外真面目に考へないものであります。自分がいよくつきつめて死ぬるといふことを感じないと申しますか、頭ではそんなこ

処であつて、これは前に出てゐたやうに、一生を終れば必ず仏の位に入る、仏と成る、徹底的に。まあこう云ふお言葉であります。但し衆生のために、衆生を度するため、他の世界、またこの娑婆の世界に来るといふ人を除く。

ところが今申しましたやうに、このいろ／＼と、親子、兄弟の死に目にあひましての感じといふものは、一生補処といふことと、一切衆生を救ふためにこの世に還つて来られるといふこととは、ひとつになつてひびきますのであります。

で、私自身の娘のことを申し上げてはどうかと思ひますけれども、つい五年前に、二十六歳で死にました娘は、これはこの最後の言葉が「仏様が見える」といふことを申しまして、まあ二十六歳の娘の臨終としては割合におちついておりまして「お祖母さんにもよろしく、誰それにもよろしく………」といひまして、それでも矢つ張り淋しかつたと見えまして「お母さん、抱いて頂戴………」と云つて、母親に抱かれたりして、しかし、仏様が見えるといふことを最後の一言として死んでゆきましたものでありますから、さういふ娘の死んだところを考へて見ましても、私としての感じは、一生補処といふことと、一切衆生を度脱するためにこの世にかへるといふことが、ひとつになつてひびきますのであります。

つまり、仏様が見えると言つて極樂世界に往生して行く

娘といふものが同時にこの私に、この仏の世界をはつきりと示して行くといふ斯ういふ感じてあります。

それになほ一昨晩でありましたか、私このところをすこし読んで居りますうちに、何だか初めて発見した如く感じましてむしろ驚きましたことは、この浄土に往生して行つて居られるところの衆生の中に、第一番に觀世音、大勢至。觀世音菩薩と大勢至菩薩とがこのお浄土に一番に往生して居られると、こう言ふところを今更のやうに発見したといふ氣持になりまして、ソウカ、觀世音、大勢至といへば私のただ頭の中の感じでは、觀世音といふのは、お慈悲のあらはれであり、大勢至といふのは仏様の智慧のあらはれであると、頭でかねて考へて居りますけれども、その觀世音、大勢至はお浄土に往生せられてゐる、この二人の菩薩達は、この娑婆、私共が生きてゐるこの娑婆で、菩薩行を御修行になつて、この娑婆で生命が終つて、觀世音、大勢至となつてお浄土に生れてをられるのであると、お経にこゝういふ風に説かれてゐるのであります。

そこを今更のやうに發見いたしましたして、そこを私として感じますことは、生れておいでになりますといふそのお言葉の心持であります。その心持といふのが、つまり、生れてしまつて、お浄土に澄まして坐りこんでひかへておいでになるとは私には感ぜられませんが、つまりこの觀世音菩薩、大勢至菩薩は私のために、始終私のために浄土に往生

してゐるといふことは事実であると私は申すことが出来ますのであります。

さうなつて参りますといふと、これは娘のことについて申しましたけれども、娘ばかりじゃない、この世の種々様々の人々がこの世を去つてあの世に逝かれるといふ、そのところに、觀音さまの御力を私を感じ、或は勢至菩薩の御力を私感じて我身にうけるといふことが事実であると、さうなつて参りますものでありますから法華經の第二十五の普門品と云ひますのが、御承知の通り、觀音經といふのであります。あの觀音經には普門示現といふことをお説きになつて居りまして、普門示現といふのは、この世の種々様々の姿、種々様々のいのちの姿になつて、そしてこの私共を濟度して下さるといふことが、例の三十三身現、三十三の御姿を種々にあらはして、私共を導いて下さるといふことをこまかに普門品のなかにはお説きになつてあります。三十三といふことはあれには限らるのであります。その外に種々様々の、いのちの姿として私共にかかることのいのちのひびきを伝へて下さるのである。

さうなつて、この世を去つて行く人々、それは沢山の人がこの世を去つて行かれる、その一を私共は知りませんけれども、矢つ張り、私なら私共が知つて、この方が亡くなられた、この友達が去つていつたといふやうなことを眼の前に見、眼の前に聞きますにつれて、そこにさう云

なされつつある。今往生して了つてむかふでじつと坐つておいでになるといふのでなくして、今私のためにお浄土に往生なされておいでになつてゐるといふ、生きたお姿と云ひますか、生きたいのちとして感ぜられる。これがここを讀みましての感じであります。

つまりこの觀世音、大勢至も浄土へ往生なされて行く方、言葉の上では一寸矛盾しますのですけれども、今申しましたやうに、お浄土で落着いて了つておいでになるお姿のいのちの姿といふものを、今の私に始終この何かの御縁で生きたひびきとして、生命のひびきとして私の生命にひびいて下さつてゐるのであると。つまり、觀世音菩薩、大勢至菩薩が、生きた生命として私に始終、折に触れ、縁にしたがつて、私にまことの生命のひびきをあたへ、ひびかせておいでになつてゐる。そこにこの觀世音菩薩と大勢至菩薩とが始終私の生命にいき通つておいでになる。それではその御縁はとなりませんと今のやうな私であれば、娘が死んだといふこともその御縁である。

こんなことを申しましては一寸どうかと思ひますけれどもその娘といふのが親にも、兄弟にも、非常によくつくしてくれました娘でありまして、さういふことから、その娘そのものが何も觀音さまではありませぬけれども、娘がこの世を去つて行く、そのところに觀音さまの生命を私を感じ

ふ世を去る人々を通じて、觀音菩薩、或は大勢至菩薩の御活動を私自身の上で感ずるといふのは事実であります。

この世を去る人々は種々ちがひますから、或はこの觀世音のはたらき、或は大勢至、つまりこの慈悲の働きか、智慧の働きか、どちらかの働き、それは仏様の働きであります。その仏様のまことの働きというものを慈悲といふ姿、或は智慧といふ姿で、私自身の上に、生命の上にひびきを与へて下さる。私はそこに生きた仏のまことを感ずるといふことになるのであります。

実はこれは長い間わからんことでありまして、私がお育てうけました近角常觀先生が、仏のまことといふものは生きたまこと、生きたまことである、と繰り返して申されたのであります。それでもその当時の私には生きたまことといふ感じがわからなかつたのであります。ところが前にも申し上げたのであります。親といふうちでも、母親を失ひまして十年ばかりしてハツとそれがわかり始めましたのであります。近角先生が仏のまことといふのは生きたまことと仰言つたのはこことだ、といふことがハツキリとなり始めたのであります。

これは言葉としては矛盾するやうに感ずるのでありますけれども、つまり親なら親が、生きてゐるうちにはこの生きたまことといふことの感じが存外うすいのであります。親がいよ／＼この世を去つて、亡き人の数に入るとい

ふ時から、この親といふものが、生きたまこととしてこの私にひびいて来る。つまり親といふものは、この世の生命がなくなつてのちに、非常にハッキリ私に生きたまこととどける。それまでは、親が生きてゐるうちには存外口ごたへをして見たり、ロクでもない議論をして見たり、勝手に我儘をしてゐました私といふものが、親がこの世を去る

と同時に、その全分のまことをただこの我身の上に着けて行くといふことがハッキリなつて来まして、然もそれは親が死んでからイヨ／＼ハッキリなつたところの私のまことを生きたまこととして伝へられてゐるのである。斯ういふことを感じますものでありますから、そこから私といふものが、私の御浄土といふものを感ずるのであります。

亡き妻の七回忌に懐ふ

三 瓶 徳 英

結婚後四十八年間同棲した妻逝きて七年目になりました。爾来自炊独居して生かされて来ましたが、五月一日の命日を御縁として二日間山口県の松村繁雄先生に来て頂き有り難い法縁を結ばせていただきました。翻つて亡妻サヨの臨終について、忘れ得ぬ一つの謎を持つて居るのであります。それは死の直前苦しうな息の中からイマ／＼とハッキリ二回言ひましたので、私が今參らせて貰ふといふのかと申しますと、ウンと返答し安心した様に目を瞑り間もなく息が止つたのであります。

其後私は時々其事について考へて見ますが、今々と云つたのは、今がお別れだサヨナラ／＼と云ふ気持ちで云つたのではあるまいか、參らせて貰ふと云ふといふ様な事は考へて居なかつたのに私が今參らせて貰ふと云ふのかと申しましたからウンと返答してこの世を去つたのであるまいかと常に思ふのであります。九年も病氣して居ましたが病床に就いてからも三年余りでありましたので其の中には喧嘩もする、法談もしました以下三ツを大字で書かせいつも拝読しました。

一、歎異鈔第九章の全文

二、信仰に入りたいお慈悲が解りたいと思つて非常に苦んで居られる人に対して近角常觀先生の御手紙の一節。

あなたの方から仏様の方に向つてこの様な者をお助け／＼と仰ぎ見るのでは安心は出来ません。たとへば今あなたにその様に苦んでおいでになるを如来様は御覽なされ、可哀想に思召しなされ、無理なき事、憐むべき者、我能く汝をまもるとの大慈大悲の御親心にて有之候云々

三、今一つは山口県の或学校長徳田潔氏の病氣重態を聞き召されて近角先生よりの御手紙の一節。

心細く覚ゆる事も行先の解らぬ事も何事も知ろし召す如来の御慈悲にて、もとより我等が為におこしたまひし五劫思惟の本願にてまし／＼候へば、親鸞一人が為なりけりとの仰せは常觀一人が為なりけり潔一人が為、サヨ一人が為なりけりと聖人の御あとをしたひ參らすのの外無之候云々

の三つを常に拝読しました。時々不審を語り合ひ話し合つた事が度々ありました。

又今度參らせてもらへばお父さんにもお母さんにも兄弟にも友達にも皆会はれる、嘸々待つて居て下さるであらう、永い間お世話になりましたと涙を流して念仏した事幾度もありました。今は私が亡き妻に助けられて生きて居る様にも思はれます。亡き妻が手織の着物二枚、現在所持し

て時々着用します。袷一枚、単衣一枚を大切に保存して居ります。作つてくれたから五十年以上になります。まだ／＼丈夫であります。近角先生の手織の着物の御話を数回も承りましたが、何時聞いても何度聞いても誠に有り難かつた事を思ひ出します。又年老いた人達が奥様のお世話になりましたが今は一人で嘸不自由であらうと米や野菜など頂く事が度々あります。

石見富士といふ富士山ソツクリの山が一里半離れた西に聳えて、其此方に沢山の山々が石見富士の上半体を残して左から流れ出て中程にもり上り、右に長い／＼裾野を曳いて海岸に出て浅利の入江を作つて日本海の水を引き入れ、海面遙に先方に、右に左に水天髣髴の大展開を見せて、私の草庵の庭池築山の感を懐かしめ、曇天雨天の時は富士も遠景も消えて、中近景の妙趣を示し、晴天の夜は日本海に点滅する漁火幾百千、東西十里に涉りて終夜大都市の遠望を思はしめる活画の中で真に自然が友となつてくれる幽棲一老骨の私であります。東京から富士山を眺めるのと少しも變らぬ気がいたします。詩のマネをした私の旧作

向西独居愚愚身 遙对石見富士浜

古老悠悠自適処 憶想無量上善人

そして後方の山では真夏でも時々鶯が美声を聞かせてくれます。良寛上人の歌

世のなかにまじらぬとにはあらねどもひとりあそびぞ

われはまさされる
といふのが感じられます。

○ 法話会の時一日講演後一人の御同朋が松村氏を訪ねて謝辞を陳べられました。此人は五年前一度講演をきかれたことがあります。四十位の一家の主人公で曰く、私は今日不思議な事で参りました。商用の為朝早く出掛け十時頃帰宅して、座敷に横臥して眠り、夢を見ました。松村先生が私の家へ来て下さった、嬉しい有り難い何をどうしようかと心配して居る途端に夢がさめてをかしな夢をみたことかと思つて居る中、間もなく郵便はがきの配達を受けました。それが井田村の親戚から、松村先生来講の知らせでありました。之は不思議だと、急がしき商用を差し繰りて自転車で参りましたとの事で、夕暮まで法縁に浴しどうでも帰らねば商用上都合が悪いとて帰られました。其家は私の所から二里以上隔つた所でありました。その時化身といふ事について聖徳太子、親鸞聖人の事並に松村氏自身の生母現妻等に就いて有り難いお話を承りました。

○ 又別の時承りましたが、近角常觀先生山口県へ御巡化の際、某信者の家にて御食事の時御膳の鮎の塩焼一皿を取上げられ、皿と箸をお持ちの儘ハラ〜と落涙なされしばらへして召し上つた時、一座五六の人々が貰ひ涙したとの松翁は無口な真面目な柔和な相好の人で、健康な時は毎日早朝安樂寺本堂へ参る事を日課として居られたとのことでもあります。聞法の時感極まりて大声に泣き出されたことが度々ありました。数多い随感記の中、私は左の一項を面白く有り難いと思ひます。
『わしや〜つまらん〜。ありがたいがほんやらうれしい

「北米日記通信」抄

田 中 文 男

村氏のお話を聞いて私も涙が出ました。鎌倉北条氏一切経校合の時、祖聖御一人のみ袈裟かけて香を召上つたとの事など思ひ浮びました。

○ 常觀先生を懐ふ毎に、常晉先生を思ひ出します。特別の御援助を受けしに御報謝が出来ない事を慚愧するばかりであります。一昨々年八月六日の御往生、御葬儀に偶然か不思議にも会はせて頂きました私は罪業未だ尽きず、不自由な老軀をもてあまし乍ら念仏させて頂いて居ります。近來一段と歎異鈔を有り難く拝読し又唯信鈔の結文を味読させて頂きます。

○ 『信誦共に因として皆まさに浄土に生るべし。今生夢中の契をしるべとして来生さとの前の縁を結ばんとなり。我おくれなばひとに導かれ我先立たば人を導かん、生々に善友となりて共に仏道を修め、世々に知識となりてながく迷執を絶たん』と噫、南無阿弥陀仏。

○ 松村氏を送りて小浜に出で全地安樂寺境内の浅原才市翁の頌徳記念の石碑を拜見しました。翁の肉筆を模写したといふ仮名文字で

『かぜをひけばせきがでる、さいちがごほぎのかぜひいた、ねんぶつのせきが、でる〜、さいち』
といふ句が刻りこんでありました。私は全翁生存中幾度も会ひ法談を交はし住宅へも行き仏檀を拜んだりしました。

が、ほんやら、あてにはならぬ。つまらん〜。あさましいのもうそのかわ、うれしいもうそのかわ、ありがたいもうそのかわ、うそのかわかさなりてなんぼへいでもうそのかわ、へくぼどうそのかわ。うそのかわにはしるもない、うそのかわにはかわもない、なんにもない、あさましいもほとけさまのもの、南無阿弥陀仏。』

私の母は、窮乏の中に育てあげた一人子である私を、海外に送りて間もなく病を得、漸く私の帰朝までもちこたへて居ましたが、私の帰来後六ヶ月にして、六十八歳を以て父のあとを追うて永眠いたしました。私の不在中、世の淋しさに堪えかねたのであります。

私は母の事を思ひますごとに、いつもその昔
しら浪を分きてぞ渡る法の舟

○ 善慧大師として彼国に入寂しました成尋法師の老母が、
の歌を遺して入宋し、その後遂に日本に帰ることを得ず

再会を期し難き我子の旅立ちのはなむけとして
もろこしもあめの下にぞあると聞く
照る目のもとを忘れざらん

と詠じつゝも
忍べどもこの別路をおもふには

からくれないのなみだこそふれ
と嘆いた心を推しはかり、無限の感動を覚ゆるものでありまして、敢て私と私の母を、善慧大師母子に比するものではありませんが、その当時私を外国に送つた母の心は、成尋法師の老母の心と同じであつたと思はれまして、今も

あはれを催すものでございます。

昭和十年七月十三日。序文抄。

ボストン日記

大正五年一月九日、日曜

新年以来今日初めて病院に出かけました。クツシンク教授が私の顔を見るなり、新年おめでたうと云はれたのは私も嬉しく感じました。午後はリーパー夫人の英語。この夫人は婦人参政権論者で、且クリスチャン・サイエンティストです。この宗教を信ずる人は、病気には医者には要らぬ。信仰の力で治癒せしめることが出来ると主張して居るクリスト教の一派で、開祖はお婆さんだといふことです。この宗派が中々の勢力を持つて居るらしく、ボストンに総本山があり、頗る堂々たるもので、中に出版部もあり、毎日新聞を発行してある他に、種々の書物も出して居ります。然しデフテリ患者にすら医療を排けて、単に御神水を飲ませるために、屢々問題になつて居りますが、此種の迷信は、世界の何所でも、或一部の者には抜き難い勢力を持つて居るものと見えます。却つてアメリカの如き、科学万能の国に於て、一面かゝる迷信が多い様にも考へられます。私の宿の主婦もこの宗旨の熱心な信者で、自分の病氣はすべてクリスチャン・サイエンスに依つて治癒したと称して居ります……。

帰途、市立図書館に這入つて見ました。誰人にも無料で

く、凡てを切廻してある。米国では女に威張られても男は致方がないだらう」と云ひました。成程その様です。女を尊重した結果不知不識の中に斯うなつたのでせうか。併しこれは表面上のことであるかも知れません。日本では人前では男が威張つて居ますが、二人切りになると、却つて男が御機嫌をとる場合が多い様ですが、此方はそれが正反対になつて居るのかも知れません。

六月二十五日、日曜

この食卓での話のうち、日本に於ける笑話として、モースさんがかつて日本の或るところに招かれて、御馳走になつたあとで、菓子皿に菓子を盛つて出された。

モースさん、これをつく／＼眺めて「これは古いです」と云ふと、主人はキッドなつて「いゝえ、新しいです」と答へる。モースさんは又「いゝえ、大変古いです」と主張する、主人はいよ／＼躍起となつて「いゝえ、非常に新しいです」と頑張る。あとで、一方は菓子皿を意味し、一方は菓子的事を論じてゐる事が分つて大笑ひをしたといふことでした。

八月五日

一体に日本の動物は昔から惨酷に取扱はれ居り候まゝ、その反動として根性も悪く相成り居り、馬でも、牛でも、犬も、猫も鼠も荒く候。子供が恐れ候も、つともと存候。当方公園にて子供等がリスや鳩をいたはり候のみならず、勞働者等も、自分に買つて来た南京豆の大部分をこれ等に与へ居り候有様などは誠に床しく……。

自由に闊覽させ……、市民であれば欲する書物を一定期間誰人にも貸出しをする如きは羨ましく思ひました。

其ホールに雄大な壁画があり、観覧者には印刷した解説書まで備へてあります。私は之等の大油絵を見つゝ、荘嚴の感にうたれました。日本の絵画には静寂な美点がありますが、壮大なる動的光景を現はしたものは尠ないのではないでせうか……。

一月十一日、火曜

一体、米国では、食物の中毒と云へば、大抵魚類にあてられたと云ふ事が多いので、こんな記事を新聞で見ますと、魚類は実に毒の多いものゝ様に見られ、此点、吾々日本人が、かかる毒力の強きものを常食として居るのを不思議の様に思ふ米人もありますが、吾々日本人としては、此国で吾々の友人が、肉の中毒する事の尠くないといふ事が少しく不思議に思へる位です。

熱々考へますに、西洋人には一般に、魚類の新鮮と云ふ事について関心がすくなく、之に反して日本人は肉類の腐敗度を識別する経験が乏しいからであります。

一月十六日、日曜

米国と云ふ国は、どうも女のえらい国です。又實際智識欲は男より女の方が強い様です。一つは優遇されて暇が多いからかも知れませんが、今日も生源寺君と此事を話すと「いや實際見渡したところ、どの家でも亭主より女が偉

九月三日、日曜

私の宿のデユ夫人。これは縦から見ても横から見ても健実と云へない遊蕩的な夫人ですが、日曜の朝になると教会へ出かけて行くのです。

アメリカではこのデユ夫人の如く、一週間中、仕度い三昧をやつておきながら、日曜には其罪ほろぼしの様にして教会に行く人達の事を「クロック」柱時計といふさうです。多分一週間中ゆるまして置いたぜんまいを一度だけまくと云ふ意味ではないでせうか。クロックとはうまくつけたものだとをかしく感じました。然しとにかく教会に行くとは殊勝の事でありませう。

大正六年 二月三日

私が赤面しましたことは、先日論文を書き上げタイプする前に一応キヤナパン医師に見て貰ひましたところ、氏は是を通覽して非常に喜んで呉れましたが、暫くして申しませうには英文も大変よろしいが、唯文中あまりに、余とか余の症例云々の文字が多いのが缺點だと批評されたことあります。この批評には私はおぼえず冷汗を流しました。一体独逸流、又は日本流の医学の論文には、成程自我の主張があまりに強い。時には理屈を以て非を理に曲げる傾向がある。英米の論文の書き振りは謙譲で、是非の判断を読者に待つ風が見え、伸々床しいと感じて居ましたので、私も成るべくそれにならひ出来るだけ客觀的に述べた積りでしたが矢張り従来の悪癖が出てゐまして、誠に善い教訓を得ました。

抄出。

編集後記

草も木もみのり爽涼の秋が参りました。矢の様に過ぎ去る人生、再びかへらない秋を大切に迎へたいと願ひながら筆をとりました。先づ御報告申し上げます。

清水凡禿遺稿集（決定版）

法悦抄

B 三六判・一八〇頁
美本・岩波新書型
現代かなづかい・ふりがな付

予約頒価 二二〇圓

京都市左京区高野原町四〇
振替口座京都一〇二一五〇

香華書館発行

であります。清水凡禿居士の遺稿の断片はすでに幾度か誌上で御照会申し、皆様もよく御存じのことでありませう、坐右におかれて御味読下さるやうお勧め申します。

△「住生について」の福島先生の御講話は、浄土教の根本問題でありまして、私共の願は「ひとへに往生極楽の道を開きひろく」一つにかかつて居るので、如来聖人の御苦勞もそこ一つを

眼目にして下さるのであります。三回に分けて先生の信味を誌上に頂きませう。東京都調布市仙川町七九四が御住所であります。

△「亡き妻の七回忌に懐ふ」の三瓶翁の原稿は、人生の晩年を、野も山も紅葉に彩られる秋景の如く、念仏慈光に莊嚴せられての御生活を打ちあけて下さいました。山口県仁保の松村繁雄氏も「今良寛」と翁の生涯を随喜して居られます。島根県大家局区温泉津町井田に草庵を結んで居られます。

△「北米通信抄」は、かつての岡山医科大学長、現在は岡山市西中山下で病院を開いて居られる田中先生の「北米日記通信」の一端を抄出させて頂きました。大正四、五年頃ではあります非常心に心打たれるものがあり、無断で抄出させて頂きました。

先生は私が岡山医大から京大哲学に転じます頃学長をしてをられ、非常に御心配をおかけいたしました。爾来三十年私の歩みをそれとなく御心にとめて下さつてゐることを、太島療養所の山田武義さんから伝聞し、懐つかしく有難く思つて居りましたところへ、御懇切な励ましのお言葉と共に「北米日記通信」の著書を頂き、私もポストンに行つた積りで通読申し、鈔か拔書きさせて頂きました。遠く深い御恩を謝

しまつりつつ。
△「随蓮を憶ふ」の稿は、歎異抄十条の伝承者として、近來にない感銘を随蓮の上に見出し、筆にまかせて書きました、御判読願ひます。

聚墨生記

御案内

毎月、第一、二、三日曜午後一時半。日曜講話。一道会館。
毎月十三日。午前午後法話会。熱田区幡野町願入寺。
毎月廿四日。午前午後法話会。昭和区小桜町教西寺。

定価 一部 十七圓（送共）

半年 百四圓（送共）

一年 二百四圓（送共）

名古屋市南区駄上町二ノ二八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 奥川 正生

名古屋市南区駄上町二ノ二八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光 第八卷第九号昭和三十一年九月十五日発行
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可